

歌が生まれる

校歌制作レポート 第15回



イラスト：山崎奈緒

再び英明高校

第3・7回目のレポートで触れた英明高校の校歌の話題をここで再び。実は、連載をご覧になった本学の現職の先生からその歌に関する貴重な情報をいただいております、それを是非ご紹介したいと思ったからです。

この校歌は、もともと女子校だった「明善高校」が共学に改組して「英明高校」と名称変更した際に作られたとのこと（うちの学校の今の状況と同じ！）。「せっかくの機会に校歌がないのもナンだから」と、当時の校長先生が歌詞を考え、鼻歌で歌ったものを音楽の先生が採譜して「仮の校歌」としたものが、25年経った今でもそのまま…なのだそうです。

情報提供くださった先生は、ご子息の母校が英明だったことからこの事情をご存知なのだそうで、「まさか長野に来て、英明の校歌を職場のサイトで見る機会が来るとは！」と驚いておられました。

その偶然には勿論私も驚きましたが、ご紹介したような背景を持つ「真情の素朴な吐露」のような歌が、細部まで練り上げた緻密な構築を、と画策し、ああでもないこうでもない、と呻吟していた私に突然のビンタのように刺さったという経験の鮮烈さに、より大きな驚きを感じています。

いやしかし…素敵な校歌だ。そのまま歌い続けてほしいなあ。

町田育弥 Profile

桐朋学園大学で作曲を専攻。中・高等学校教諭、音楽大学講師など常に教育に携わりつつ、作・編曲・演奏活動を展開。作品は、歌曲、室内楽、吹奏楽、管弦楽、劇音楽など多岐におよぶ。著書にピアノ教本「みみをすます」全4巻、歌曲集「あったかい」などがある。2014～2020年まで本学幼児教育学科教授を務めた。現在、本学客員教授、認定こども園恵泉幼稚園（さいたま市）園長。

♪♪♪ 9月11日 レポート

歌詞に掬い切れなかった2つのイメージ

上田の風土・自然・歴史などの地域性を歌うために私が応募語から選んだのは、学海、山、緑、空、風。そこから「学びの海・木々の梢・雲の行方」という詞句を作りました。学海 → 学びの海 は「これしかないでしょ！」レベルで早々に決まったのですが、「木々の梢」と「雲の行方」を決めるには、実はかなりの逡巡がありました。というのは、応募語の中にあった「少雨多照」と「雨音」、それから「通学する学生の多くが歩くであろう桜咲く道や学生ホールから見える山と木々、木漏れ日の美しさは学生生活の大切な思い出です」という、応募語というよりは「お便り」に近い言葉にかなりグツときてしまい、是非とも「雨」と「通学時に見える木漏れ日」を入れたい、と思っていたからです。

塩田平は日本有数の少雨多照地域であることから、雨は命に直結する文字通りの慈雨であり、雨乞いの神事や、龍神伝承、溜池群など独特の地域文化を生んでいます。雨音に耳を澄ます心の底にある静かな祈り…。そして、少しぐらい落ち込んでいる朝も、笑いかけのように揺れて光り、元気を取り戻させてくれる木漏れ日！ うん、それ、俺もワカル！

…というわけで、はじめは「木々の梢に」「雲の行方に」「雨の静寂（しじま）に」「朝の光に」を同じ箇所、詞句の候補にしていたのでした。結局、海・山・空、つまり 低→中→高 という視線（意識）移動のリズム感を優先して現状の選択になったのですが、どうしても諦め切れず、1番と2番に分けようかとも考えましたが、歌い切りのワンコーラスとする決断が勝り、「ならばヨコではなくタテに重ねてしまえ！」というわけで、光と雨（水）のイメージはピアノパートに託すことにしました。どこがどうだとは言いませんが、試演の演奏からそれを感じ取っていただけると嬉しいです。

U・E・D・A は消滅してもいい、という可能性

校名を歌詞として歌わないかわりに、UEDAを音名に置き換えて旋律とし、それをテーマのように扱う、というアイディアに私がかなり拘っていたことは、これまでのレポートを読んで下さった方はご承知のことと思います。ところが、コトとシダイによってはこれは無くなってもいいと、実は今思っています。その話は次回に。 それではまた。